九国プレ２０１８

国　　語

九州国際大学付属中学校

【注意事項】

1　開始合図のチャイムが鳴るまで、この問題用紙の中を見てはいけません。

2　開始合図のチャイムが鳴ったら、最初に解答用紙と問題用紙に受験番号・氏名を書きなさい。

3　試験時間は 50 分です。

4　解答はすべて、問題の指示にしたがって解答用紙に記入しなさい。

5　問題用紙で、印刷がはっきりしないところがあったら、静かに手をあげなさい。

6　答案ができあがっても、終了合図のチャイムが鳴るまで静かに着席していなさい。

字数制限のある問題については、句読点なども一字とします。

受験番号		氏名	

一　次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。

本を自分のものにするということは、具体的には、その本の中に重要な自分にピンとくる文章を見つけるということだ。一つもピンとくるところがなければ、その本は自分には縁がなかったということになる。本を読んでいくと、ⓐキョウカンできる文章に出合うことがある。まずは、そこから線を引いていく。誰かに見られることなどを考えずに、思い切って勇気を持ってしっかり引く。線を引くのも慣れだ。

線を引いてしまえば、それは自分の本になる。他の人が線を引いたあとの本を読むのはつらい。自分の刻印を残した本は、いとおしくなる。

A、旅行先の地図を考えてみよう。最初に見たときには、のっぺりとしたただの地図だ。しかし、現地に行ってみて、実際に足を運んだところに赤く○を付けていったとする。経路を矢印で地図に書き込んでもいい。素晴らしく印象に残ったところは、三重丸で囲んだり、行った店の名や出会った人の名を書き込む。そうやってみると、地図は「自分の地図」になる。B、旅行が終わった後にも、その地図は①捨てがたいものになる。あとから見返してみると、そのときの思い出が、自分のチェックポイントからよみがえってくる。何もチェックをせずにおいた地図は、捨てても惜しくない。また手に入るからだ。しかし、一番その町に馴染んでいたときにつけた印は、あとからではなかなかつけにくい価値を持っている。本の場合も同じだ。

本に対しては、X で臨むと、出会いの質は高くなる。いつでもまた読むことができる、というのは本の利点ではある。しかし、「この本に出会うのは最初で最後かもしれない」と思いながら読むことによって、出会いの緊張感は高まる。線を引くときにも、たとえ他の人にとってはここは重要でなくとも、自分には大事なところなんだ、と確信して引くのであれば問題はない。

そうしてたくさん②自分の判断力を込めて線を引いた本は、あとから見返すときに、非常に価値が出る。読み返すのに、初めて読んだときの数分の一、C 十分の一ⓑテイドの労力で、内容を見返すことができるのだ。線をまったく引かないで読んでしまった本は、見返してみても記憶を呼び起こすのに時間がかかる。しかし、ところどころにしっかりと線が引いてあれば、それを手がかりにして、読んだときの記憶を呼び起こしやすくなる。また、線を引いたところだけを辿って読んでいけば、一応の内容はつかめる。これは、ほとんど時間のかからない作業だ。

何回かⓒ反復して本を把握することによって、本の内容は定着してくる。一度読んだだけで記憶するというのは、なかなか難しいものだ。線を引いた箇所だけでもいいから何度も見ていると、だんだんその文章に慣れてくる。

緊張感をもって読んだ本は、読み返す価値がある。本を買ってきれいなまま斜め読みし、また売ってしまうというやり方は、一見ⓓ効率がいいようだが、③私から見ると、実に無駄の多い読書だ。もちろん、娯楽本ならそれでいい。しかし、緊張感ある読書をした場合には、その本をⓔカンタンに手放

←細かい部分を飛ばしてざっと読むこと。

→楽しむための本。

すのは惜しい。とりわけ、自分の自己形成に関わった本は、線を引いた形でとっておきたい。十年後、二十年後に読み返したときに、発見があったり感慨（かんがい）をもよおしたりしやすい。誰でも自分に対しては興味がある。自分が線を引いた本は、あとから否定するにしても、関心を喚起（かんき）するものだ。

（齋藤孝『読書力』より）

←身にしみて感じること。

→よび起こすこと。

問一 ――ⓐ～ⓔの漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して答えなさい。

問二 [A]～[C]にあてはまる言葉を、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しかし　イ すると　ウ たとえば　エ あるいは

問三 [X]には四字熟語が入ります。適切な四字熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一期一会　イ 一心同体　ウ 一意専心　エ 一日千秋

問四 ――①「捨てがたいものになる」とありますが、それはなぜですか。文章中の言葉を使って、二十字以内で答えなさい。

問五 ――②「自分の判断力を込めて線を引いた本」を別の言葉で表したものを、文章中から十字で抜き出しなさい。

問六 ――③「私から見ると、実に無駄の多い読書だ」とありますが、本を斜め読みし、売ってしまうことはなぜ無駄だと筆者は考えているのですか。理由を説明しなさい。

問七 この文章の進め方として**適切でないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じ内容を表現を変えて繰（く）り返し説明することで、筆者の考えを強調している。

イ 具体例を交えながら説明することで、説得力を高めながら結論づけている。

ウ 逆接の接続詞を多用することで、筆者の考えがより明確にわかるようにしている。

エ 問いかける言葉を入れることで、読者が自分の考えを持ちやすいようにしている。

二　次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。

小学五年生の私（ハル）は、夏休みの間おとうさんにさまざまなところへ連れ回されている。今夜はお寺に泊まることになった。泊まっている人の寝顔をのぞきこむ幽霊の話を聞いたあと、本堂で寝る準備を始めた。

「肝試ししよう」

私はぽかんとしておとうさんを見あげた。おとうさんはシャツを脱いでTシャツに着替え、ふとんの上に立って満面の笑みを浮かべている。

「まだ九時にもなってないぞ。ちょっと、ⓐ墓地のあたり散歩してこよう」

「ぜったいにいやだ」

強く拒否したはずが、私の声はたよりなく、うそをごまかす小さな子どもみたいに響いた。

「平気だって。最近は何もないっておばあさん言ってたし、二人いれば平気だよ」

「あ、悪趣味だよ」

「そうかなあ。夏といえば肝試しだと思うんだけど」おとうさんはちらりと私を見、

「じゃあいいや。おれ一人でいってくる。まだ眠くないし」

そんなことを言いだすので私はフルスピードで立ちあがり、おとうさんの腕を握った。

「よしいこう、いこういこう肝試し。そのかわり、絶対に一人にしないでよ。一人にしたらどんなことになるか覚えておくがいい、私はあんたを逮捕させることだってできるんだし、本気になったら、もっと、もっと、も、もっとすごいことだって」

「わかったわかった、二人でいこう」

私たちは本堂の引き戸を開け、木のⓑカイダンをギシギシいわせており、境内を横切って墓地を目指した。あたりは月明りで、ぼんやりと明るかった。黒い絵の具のついた絵筆を洗ったあとの水のようなそんな色だった。日暮れ時までうるさいほど鳴いていたせみは眠ってしまったのか、なんの音もきこえてこない。ときおり風が木々を笑わすように吹き、葉がこすれあうかすかな音が耳に響くだけだった。

山の斜面に建つ墓地は、思いのほか広かった。墓石と墓石で区切られた道は細く、迷路のようにくねくねと入り組んでいる。①指が食いこむくらいの力をこめて、私はおとうさんの腕を握りしめていた。すすり泣きがきこえてこないか、耳の奥が痛くなるほど耳をすませる。

「朝になったら景色いいんだろうなあ。こんなところに埋めてもらうのもいいな、でもあれかあ。のぼり坂きつくて、めったに人が墓参りにきてくれないかなあ。そんなことないか、ほら見てみろ、ずいぶん花が活けてある、あ、酒もある、まんじゅうも。感心なもんだなあ」

おとうさんはのんきに言って、左右のお墓を指さす。たしかに、薄い闇の中にひっそりと立つⓒ灰色の石の前には、黄、赤、紫、色とりどりの花が飾ってあり、透明のⓓエキタイがつまったガラス瓶が置いてあった。それらに感心できるほどの余裕はなかったが。

両側を墓に囲まれた細い通路を右に曲がり、左に曲がりしておとうさんは歩く。頭の上でだれかがか細い声をあげたように思い顔をあげると、ずいぶん高いところにみっしりとついた葉が影絵のように揺れ動いている。

「さっきの話、本当かなあ」

声を出していないと不安だったので私は言った。できれば、うそに決まってるよ、そう答えてほしかったのだが、

「本当じゃないかなあ」

おとうさんは言った。私は黙った。あたりはまた静まりかえる。突然の侵入者をチェックするように、ならんだ墓はひっそり、ひんやりとした視線をこちらに送っている、そんな気がする。

「その女の人は、だれを捜していたんだろう」

その話はもうやめてほしかったのにおとうさんは続ける。

「さあ」

「きっと恋人だろうなあ。恋人と約束していたとか、伝えたいことがあったとか、きっとそういうんだろうなあ。その女の人は今でも捜しているんだろうか。どっかちがうところにいって、同じように」

②私の指を腕に食いこませたままおとうさんは角を曲がり、ふとそこで口を閉ざした。おとうさんから数歩遅れて私もその角を曲がり、息を[※]。角を曲がっても今まで歩いてきたところと同じ、墓に囲まれた細い通路がのびているのだが、一番奥、つきあたりのお墓に、小さな明かりが灯っていた。細い細いろうそくのような光が、たよりなく動いている。ちらちらと、まるで宙に浮かぶように。

「いた、いた痛いよハル」

③私は指によほどの力をこめていたらしい。力を抜くかわり、両腕でおとうさんの腕をつかむ。

「なんだろうあれ、ろうそくかな、だれかが火を灯していったのかな」

声は上ずっているのに、おとうさんは引きかえさずじりじりとそちらに近づいていく。戻ろう、いっちゃだめだと、いくども言おうと口を開けたが声はでず、私はただ口をぱくぱくと動かしていた。

一足、一足、つきあたりのお墓に近づく。頭の上で葉っぱが笑う。今日の夕方、私たちがたどりつくより先にだれかがきて、お花を活けて、ろうそくに火をつけていったにちがいない。そうにちがいない。でもどうしてその火がまだついているの？風だって吹いているのに？それにろうそくの火はあんなにちらちらと動くものだっけ？いやいや、きっとものすごく長いろうそくなんだ、何時間でも消えないような。それにこんなにゆっくりした風がろうそくの火を吹き消せるわけがないじゃないか。一人、自問自答をくりかえしながら、おとうさんに引きずられるように先に進んだ。ⓔゼンシンに鳥肌がたち、やわらかい風がざらざらと感じられた。

「ハル」

おとうさんが小さな声でささやく。

「ろうそくじゃない」

お墓の数メートル前まで近づいたおとうさんがそう言ったとき、思わずおしっこをちびりそうになったが、おとうさんの背中につぶれるほど顔を押しつけて［A］こらえた。

「蛍だよ」

おとうさんの声は背中からじかにきこえた。私は顔を離し、［B］おとうさんの脇腹から顔をだした。

私はその生き物をはじめて見た。それは、一番奥の、田中家のお墓にではなく、お墓のわきに植えてある背の低い木に数匹とまっているのだった。ぽうっと、私の小指の先より小さな、青いような白いような光がふくらみ、数秒して［C］消える。そのすぐそばでまた［D］明かりが灯り、しばらくして吸い込まれるように消える。私とおとうさんは息を殺してその不思議な明かりを見つめた。あちらで灯り、こちらで灯り、ほのかな明かりはたえまなく続く。その静かな弱い明かりはあたりの音すべてを吸いこんで、点滅をくりかえしている。音の消えたクリスマスみたいだった。④この世ではないお祝いごとみたいだった。

（角田光代『キッドナップ・ツアー』より）

問一　――ⓐ～ⓔの漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して答えなさい。

問二　［A］～［D］にあてはまる言葉を、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　ふっと　イ　そっと　ウ　ぽっと　エ　ぐっと　オ　かっと

問三　「墓地に肝試しにいくおとうさんと私」のことを言いかえた言葉を本文中から六字で探し、抜き出しなさい。

問四　［※］にある言葉を入れると、「おどろいて息をとめる」という意味の慣用句が完成します。［※］に入る適切な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ひそめた　イ　こらした　ウ　のんだ　エ　はずませた

問五　――①「指が食いこむくらいの力をこめて、私はおとうさんの腕を握りしめていた」

――②「私の指を腕に食い込ませたまま」

――③「私は指によほどの力をこめていたらしい」について、次の問に答えなさい。

（1）――①～③から「私」が指に強い力を込めていることが分かります。この動作にはどのような気持ちが表れていますか。その気持ちを［　　］心（しん）と表したときに、［　　］にあてはまる言葉を、ひらがな**五字以内**で書きなさい。

（2）「おとうさん」は私と同じ（1）の気持ちがあるにもかかわらず、好奇心ももっている様子が読み取れます。その二つの気持ちを同時に持ち合わせている様子が読み取れる一文を文章中から探し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六　――④「この世ではないお祝いごとみたいだった」について、みさとさん・あきらくん・えみこさんが会話をしています。あなたがこの会話に参加していたとしたら、どのような意見を述べますか。会話をよく読み、理由がはっきりとわかるようにしてあなたの意見を書きなさい。

みさとさん　「この世ではないお祝いごと」ってどういうことかな。

あきらくん　「クリスマスみたい」って書いてあるから、「お祝いごと」は蛍の光がピカピカと点滅している様子からそう感じたんだと思うな。

みさとさん　じゃあ「この世ではない」ってどういうこと？

あきらくん　それは、この場所が墓地だからそう感じたんじゃない？

えみこさん　うーん。本当にそれだけなのかなあ。あなたはどう思う？

あなた　［　　］

問七　この文章の表現の特徴として最も適切なものを次から選び記号で答えなさい。

ア　会話の中で同じ言葉を繰り返し用いることで、会話にリズム感をもたせようとしている。

イ　風景の表現にたとえを多用することで、登場人物の心情をイメージしやすくしている。

ウ　様々な色を鮮明（せんめい）に描写（びょうしゃ）することで、非日常的な雰囲気（ふんいき）を表現しようとしている。

エ　言葉の順序を入れ替える倒置法を用いることで、場面が転換（てんかん）していることを表している。

三　次の各問いに答えなさい。

問一　漢字の読みには音と訓があります。次の熟語の読みは□の中のどの組み合わせになっていますか。ア～エの記号で答えなさい。

①　口紅　　②　残高　　③　長年

ア　音と音　　イ　音と訓
ウ　訓と訓　　エ　訓と音

問二　次の慣用句の□にあてはまる言葉を、あとの意味をてがかりに答えなさい。なお、ひらがなでもかまいません。

①　目から□が落ちる
〈あるきっかけで、それまでわからなかった物事が急に理解できるようになる。〉

②　焼け石に□
〈少しぐらいの努力や援助（えんじょ）では、効果（こうか）が上がらない。〉

③　□の一声
〈多くの意見をおさえつけ、否応（いやおう）なしに従わせる権力者の一言。〉

問三　次の□に漢字二字を入れると四字熟語が完成します。それぞれにあてはまるものを後の語群から選び、漢字に直して答えなさい。

①　品行□　　②　言語□　　③　空前□　　④　□風月

【語群】
どうだん　　かじん　　かちょう　　ほうせい　　ほうかい　　ぜつご